

ジークの魔法書店

癸未あいね



目次

| | |
|--------------------------|---|
| 第1章 お店 | 1 |
| 第2章 激変 | 3 |
| エピローグ：ジークの魔法書店 | 5 |
| あとがき | 6 |

第1章 お店

そんなに広いお店ではない。ただいつも人がいる不思議なお店。中にあるのは本、本。しかし古本屋でもない。中にいるのは女の子2人、男性1人、あとはお客さん数人。

「ジークさん、風魔法の初歩的な入門書をください」

「ああ、風魔法の初歩ね、それならこのゲルギバイナーが書いた、風魔法の使い手がおすすめだよ。これを読めば、バフ、デバフ、エンチャント、下級攻撃魔法が使えるようになるぞ！」

「ありがとうございます。僕、教会に風魔法使いの適性があるって賜物判定で言われて、絶対やらなくちゃって想ってたんです！ 魔法に適正があるだけでもすごいのに、ジークさんにそう言ってもらえて嬉しいです！」

「お買い上げは2100 LYREになります」

「分かりました！ 2500 LYREでおつりください」

「はい、400 LYRE、ありがとうね」

「毎度ありがとうございました～～♡♡」

こう言ったのは、妻のアンナで火属性魔法使い、勝気だが、根はいいやつで僕は心底信用している。

「もう、ジークはいつもアンナさんに甘いんだから」

この子は地属性の精霊のグランテシアで契約の条件が結婚だったので結婚した。重婚になってしまったが、しょうがない、これはまったく悪意がない。

「グランはそんなに嫉妬してちゃダメね～、もっと素直にならなくちゃ！」

「ですって、ジーク様！ どうすれば……」

そんなこと言われてもなあ、僕にはどっちも大切としか言えない。

僕は元エルグラント魔法国の魔法軍総隊長で気性の荒さから”暴君”と恐れられていた。

それを覚えてくれたのはアンナで彼女に言い寄られるたびにその胸の大きさに参ってしまい、もはや今は彼女の掌中にある。ほんとにね、胸がほどよく大きくてもうダメだった。

グランテシアはアンナと結婚する前に結婚した精霊で地属性に適性のある僕になつてくれる高位の地属性精霊でなんか僕の魔力が好きになっちゃったんだって！

魔力は意思の力に比例して強くなるので、それが気に入ったみたい。魔力を吸収するとそれはもう喜んでくれるんだ！

その魔力を使って、グランが地属性の高等魔法を使ってくれるから、これは喜ばしいこと。地属性はガードが固いよ！

「私は自分で魔法使えるからいいけどね」

そう言ったのはアンナで彼女は火属性のバフ魔法と攻撃魔法をふんだんに使える火力担当魔法使い。彼女もかなりの強さで、冒険者ギルドで傭兵やクエストをこなしてしのいで来たらしい。で、”暴君”と恐れられてる僕がかっこよかったんだって。その僕に女好きの人が見せる”隙”を見つけて、アプローチしたそう。なんか落とせそう、かっこいいだって。こんな超美少女2人に愛されて、僕はなんて幸せなんだ！って世界の中心で愛を叫びたくなってしまったそう、2人とも可愛すぎ～！！

「あの～、水属性魔法の防御結界を教えてください」

「耐性アップのことか、でしたらこちらの属性魔法の壁なんていかがでしょう？ あらゆる属性に対する耐性をアップしてくれますよ？」

（全部ジークが書いたんだけどね）

こらアンナ、心の声が漏れてるぞ！

「お買い上げ22000 LYREになります」

「高いわね、負けてくれない」

「う～～ん、しょうがないですねえ、21000でどうですか？ これ以上は負けられません」

「あなた、いい男ね、ちょっと今日…」

「ダメです！」

グランちゃんが飛び出して来た、可愛い。

「まあ、いいわぁ～、ありがとう魔法書、大切に読ませてもらうわね」

「「ありがとうございましたー！！！」」

いやあ、今日もよく売れるなぁ～♪

そう、ここにある魔法書のほとんどは僕ジークが書いたのさ！ 一応僕は他の属性も操れるけど、まだまだで、地属性魔法なら強化と研究を重ね、今はもう大魔法使いに！

「ジーク様かっこいいですう」

「甘いわねグラン、見なさい、この顔を！ にやけてるでしょ」

「そんなことないですう、ジーク様はかっこいいですう」

「まあ、私もかっこいいと想ってるけど…」

こんなに可愛げのある妻二人に見守られて、僕は嬉しいよ、うん、嬉しい。

このアンナたちと安全に暮らすために僕は軍を去った。その背景には、教会の教えもあり、軍の領土拡大政策も嫌いだったし、神様が人々と平和に暮らしなさい。というんだったら、もう軍にはいることはないということで、僕は軍を去った。今はこうして可愛い妻たちと一緒に暮らしている。

「いやあ、今日も平和で…」

「——ジークさんギルドから緊急要請です」

第2章 激変

「ギルドから！？ な、なにがあったんだ？」

「西のドラゴナイトより竜騎士が数十飛来して、西のエルフの里が壊滅しました。そしてここ、エルグラントの主都目がけて接近しています。事態は非常に急を有するので、即刻援助していただけないでしょうか」

「分かった、その竜騎士どもを葬ればいいんだな、分かった。案内してくれ」

「了解、行きましょう！」

ドラゴナイト、最近勢力をつけてきた竜を信奉する新興国家だ、竜をてなずけて乗ることを覚えたか。やつらの目算は首都の壊滅とエルグラントの奪取。これはもう放ってはおけない。

「私も行きます。竜どもをたたき殺します！」

「私も行くわ、行きたくないけど」

グランとアンナも了解してくれた。あとは竜どもをぶち殺すだけ。ただ戦闘から離れていて勘が取り戻せるか、分からないが。

「ほら、見えるでしょう。竜騎士たち。町を破壊しながら、政府に向かっていきます！ 政府を破壊する気です！」

「ふん！ そんなことさせないがな！」

「ギルドの魔法使い、魔法軍も一緒に戦っています！ 奴らをぶちのめしましょう」

「燃えさかる紅蓮の炎よ、我に力を与えたまえ、魔力上昇、クリムゾン・バースト！！」

アンナが自らに魔力を底上げする魔法をかけた。俺もこうしてはられない。

「静かなる大地の精霊よ、我らの敵に圧倒的死を！ サンドブラスト！！」

砂嵐を起こして、やつらの目をくらます作戦に出た。砂嵐は竜騎士周辺でだけ起こり、少しずつダメージを与える、前線で戦ってる兵士たちの役に立てばいい。俺は全速力でやつらのもとに向かった。

「ジークさん、僕覚えてますか？ 魔法軍で一緒だった...」

「ああ、ジェクスか懐かしいなあ、だが、今は、こうしている時ではない！」

竜騎士4体がこちらに向かって接近してきた。

竜が紅蓮の火炎を吐く。その熱はかなりのものだった。

「くっ！ アース・シールド！！」

地面から出現した盾で竜の火炎を防ぐ。その間に魔法を構築する。

「私は火属性耐性が高いですよ」

こう言ったのはアンナだ、彼女は火属性魔法使いだけあって、耐性が高い。

アンナは突進して魔法を放った。

「ヘルファイア」

竜騎士を一体葬った、だが——

「フローズン・フリーズ！」

「な、凍結魔法——ッ！！」

アンナは一瞬固まってしまった、身動きが少しの間、取りづらい中……、
竜の火炎がアンナを焼き払う、アンナは地に落ちてしまった……

「なっ……アンナ！！」

急いで俺はハイヒールをアンナにかけた。ただ傷は大きく全快できなかった。

「油断した、凍結ごときすぐ解除できるんだが、その間に炎でやられてしまった、こいつら生かしておけない」

やつらは複数で攻撃している、連携して、俺たちを葬ってやろうとしているだろう。

魔法軍も戦っていて、たくさんの死傷者が出ている、竜騎士も魔法兵士もたくさん死んだ、これ以上、犠牲者を出すわけにはいかない。

「ほんとによくやってくれるわね」

グランがキレた、グランは平和に生きることが大好きな子だ、それを乱すやつは容赦しないらしい。

「ジーク様、こんなゴミども葬ってあげて、アンナさんも傷つけて許しておけない」

まあ、エルグラントも悪いところはいっぱいあるが、こいつらはもう生かしておけないな！

「私の魔力ほとんどあげちゃう、だからやって！」

「分かった！」

竜騎士たちが迫ってきた、まだ半数はいる。

「燃えさかる地獄の業火よ、我に力を、インフェルノ・バーン！！！」

「母なる大地の精霊よ、我に力を、グラビティ・ダウン！！」

竜騎士たちは焼かれ、増幅された重力によって、地面にたたきつけられた。

「グラウンド・ニードル！！！」

地面から出現した無数の長い針が竜騎士たちを貫いた、彼らは完全に息の根を引き取った。

それと引き換えにグランの姿が見えなくなった、力を使い果たし、精霊界に帰ったのだろう。

「いやあ、私からすれば、こいつら雑魚だったわね」

「俺たちを怒らせるのが悪い、もう行こう」

俺たちは仕事を終え、自分たちの居場所に帰った。

あとには瓦礫の山になった町だけが残った。

エピローグ：ジークの魔法書店

グランはそれから、半月戻ってこなかった。力を使い果たし、疲れたのだろう。ドラゴナイトもあれから何もしてこないし、よかった。

「帰ってこなければよかったのに」

「こらアンナ、そういうことを言うもんじゃない」

「まあ、いいじゃないですか、アンナさんもきっとそんなこと想ってないですよ、私たちは3人で一つなんですから♪」

「まあ、別に悪くないけど」

アンナは想ったことをすぐ言う、本音がよく取れて分かりやすい。

「ジークの魔法書店も今日も無事開店だし、よかったじゃないか！」

「何事もないのが一番ですよね～」

「私はジークといるのが一番だけど」

しかし、俺たちは強すぎる、罪なくらい強すぎる、あれだけいた竜騎士どもをまとめて葬ることができた。

都市の復旧には時間がかかるだろう、しかしエルグラント政府が無事でよかった、この国あっての俺たちなので、国には感謝しないとな！

「ほんとにいい気分ね～、あれだけいた竜騎士たちを皆殺しにする快感！！　ぞくぞくするわ！」

アンナが当時の状況を思い出してぞくぞくしている、いい思い出になってよかった。

「あの～、ごめんください～」

「「あ、いらっしゃいませ～～♪♪」」

やっぱり何事もないのが、一番だな～～♪

☆終わり☆

あとがき

こんにちわ、愛根です♪

私を主人公にした作品を作ってみよう！ ということで、男の子を主人公にしてみましたよ♡ 男の愛根もいるので、書くのはそこまで難しくなかったです（キャラを立てるという意味で）

やっぱり最強の魔法使ってことで、戦闘があった方が、面白いですよ、最初は戦闘のないバージョンも考えてみたんだけど、キャラが立たないのであきらめ気味だったんですが、戦闘ありにしてキャラが立って、短編小説としてまとめ上げることができました！

プロットではアンナが殺されるパターンも考えてみたんだけど、アンナがあっさり死ぬのはよくないとして殺さない道を考えました！ 結果、殺さない方がよかったかなあ～ってなりました！ あ、復活する方法も考えてありましたよ♡

神様はいつも私たちのことを見守っていてくれます、あなたがよくないのかなあ、と想っていることも神様は理解し、愛してくれています、安心して下さい！

アンナって誰をモデルにしてるか、分かるかも…あかねさんです！ もちろんww

あなたは愛されている光の子ども、愛されるのに努力は要らないのです☆（お前が言うかあああ！！♡）

アーメン☆彡

2026年2月7日

癸未あいね

愛根のツイッター☆

<https://x.com/2019Lapis72666>

☆愛根の音楽倉庫☆

<http://ss914441.stars.ne.jp/>



BCO.f3197b17-6b16-4a8a-bb9f-c487e834ae1a.png

1人精霊じゃないけど、AIが作ってくれないので！！

ジークの魔法書店

著 者 癸未あいね

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
